

つて新旅行券を得なければならぬのである。さればわれは、この朋友や、羅漢や花未だ紅に、苔蒸した躑躅の木や、また夕陽の琵琶湖を見んが爲に毎夕上った高臺等に告別の辭をのこして、再び汽車に乗つて、普通の場所へ歸ることゝなつた。

寺を去ると俄に雨が降つて來て終日止まなかつた。が車から見ることが多くて、大いに慰藉を得た。頃は田植だ甚だ多忙の時、田は男女で埋まる程で、泥のなかへ膝を没して、笠着けて、藁の衣服や油紙、蓑等を着て雨を除けて居る。農事中では、それ程汚濁い、骨の折れる仕事はあるまい。仕事は鍬や、重い四角な熊手であるので、尤も牛や小馬に曳かして耕すのも見た。その背には一寸と屋根を作つて雨に濡れぬやうにしてあつた。田は大麥や菜種の收穫を了ると直に、鍬で起して水を灌漑して、土を泥にして、熊手でならすのである。稲の苗は苗代に密生してあるのを、田が植えるばかりになると、引抜いて、根を洗つて、束にして、泥土の中の處々へ投げる。それから男女がそれを指先で泥中へ植えるのであるが、その植えるのゝ早いこと、動かずに八九株位を植える。さて植上げた田を見ると全然淡い緑の霧のやうに見える。境界の畔には豆や野菜を植える。これが爲に地所の廢りは少しもない。これが六月の十八日、梅雨期の初めて、旅行者殊に風景畫家の爲めには甚だ不愉快な時節である。

(完)

觀覽者の聲

これは太平洋畫會展覽會水彩畫室の聞き書と二三誌友の投書とを集めたものである。

●丸山君の『薄日の妙義』はエゴイ ●吉田君の『富士』はトクサがかゝり過てゐる、本磨きである ●大下君の『木崎湖』の白丸は魚でも浮いてゐるのかと思つた ●中川君の空は不相變ラシヤ紙的だね ●中川君の『入間川』や『秋のくれ』はちと鼻につく ●石井君の『舞姫』は美しい、こんなものを描く石井君も隅には置けぬ、但し毛布は綿入のやうでボテテ ●吉田君の『月見草』は水中のやうな思ひがする ●藤島君の『淺間山』山上を汽車が通つてゐます ●茨木君の『夕日の山』これは荒彫りである

△ △ △

人は先づゼントルマンたるべし。而して後に、或は學者、或は政治家、或は農夫、商人たるべし。

ゼントルマンたるの修養は本なり、職業的學問は末なり。之を顛倒せる教育は禍ひなる哉。(羽仁吉一氏『隨感』青年の友)

美術家もまづゼントルマンたるべし。ゼントルマンならざる美術家の作品は、如何に巧妙を極むるといふとも眞の生命あることなし。